

「それぞれの子どもらしさを求めて」より (七)

名古屋市立大高幼稚園



ふたりだけであそびたいの

じろうと、たろうが、砂遊びをやっていた。じろうが、いっしょうけんめい水路を掘っていた。掘る予定のところにすじをつけてあるのがみえたので、スコップをもつて、

「先生も掘るわね」

といって、掘りはじめた。そこへ、みねおがやってきて、

「何しているの？」

と聞く。しばらくようすをみていて

「ほくも手伝ったるわ」

といって、いっしょに水路を掘り始めた。

じろうとたろうは、黙々と取組んでいた。

そのうちに、としおとよしおも、

「入れて」

といってきた。あまり人数がふえると、じろうたちの活躍の場が、なくなってしまうということを感じたので、

「先生も入れてもらってるから、じろう君とたろう君に聞いてね」

といった。じろうは、いとも簡単に

「いいよ」

と返事をしていった。しかし、行動が活発になり、だんだん水路が広がっていくうちにいつのまにかたろうが、なざけない顔で立っている姿がみられた。じろうは、水をくんだり、掘ったりして元気に遊んでいた。そのじろうにすりよるようになって、たろうが何かささやいている。用事があった教師はその場をはなれたが、しばらくして砂場にもどると、すでにそこにはじろうとたろうの姿はみられなかった。

◇ ◇ ◇

教師が参加することによって、他の子ども目をひいてしまった。ふたりでひっそりと楽しく遊んでいた場の中に、他の子どもが入り込み、このふたりのいる場所がな

くなくなってしまったのだと思う。ふたりの遊びに入り、教師もいっしょにやることになって、同じ気持ちをもちたいと思ったことが、かえって逆になってしまった。消極的な内向性の特に強いこのふたりが、やっと遊び出した時である。もうしばらくふたりの世界を守ってやり、自己充実をはかってやるのが大切であったと、大いに反省をしたことである。(五歳児 九月十八日)

### アーンアーンいたいよう

やえ子はぬいぐるみのくまを、ゆかはねこをだいて、あわただしく職員室へはいてきた。やえ子はくまを指さして、

「たいへん、たいへん、この子(くま)熱が出ちゃったの」

といいながら園長先生の顔をみた。そして「あっ、ここでもいいわ。病院にしましょう」と、とっさに職員室は病院に、園長先生は

院長先生に、主任先生は看護婦さんに早がり。

「どうしたんですか？」

「この子、熱が三十九度もあるんです。

はしかでしょうか。みてください」

おなかをみたり、脈をみたりする。

「食べすぎですね。きのうの夜ごちそう

をいっぱい食べたんでしょ」

「ええ、まんじゅうにバナナに、アイス

クリーム」

「あら、そんなにたべたんですか、いけませんね。熱が高いので、注射をしてあげ

ましょう。この注射は太いので、おしりに

しましょう」

消毒をして、太い注射をするまねをしてや

る。すると、

「この子きつと、痛いと思うわ、わたした

ちで泣いてあげましょう」

「アーン、アーン、いたいよう」

とふたりが声をあげて泣き出した。

人形を生きている子どもとしてみているが、一方人形は人形であって泣けないから代りに泣いている。子どもの世界のふしぎさ、楽しさに、しばらく院長であることを忘れて、子どもたちのしぐさにみとれていった。

「これでだいじょうぶですよ。おくすりをあげますから少ししてから誰か、とりにきてください」

「ありがとうございます」

とままごとの場へ帰っていった。

きれいなケント紙をこまかくきり、小袋を作って入れ、さらに大袋に入れて薬袋を作る。しばらくして薬をとりにきた。

「三分はいつていますよ。食前にのんでください。おだいじにね」

翌日、またふたりでやってきて、

「まだ少し熱がありますので、みてくだ

さい」

におどろいたのか、やえ子が

「熱が下がったので小さい注射にしてくだ

さい」

という。

「きょうは小さい注射でいいでしょう。

腕にしましょうね」

と小さい注射をするまねをしてやる。

「よくもんでくださいね」

「お薬がなくなつたのでください」

「看護婦さんに作つてもらつてください」

主任先生の看護婦さんはこの前のとちがう

お薬を作る。ゆかのねこも診察をする。

三日目廊下で、やえ子に会つた。

「くまちゃんはいかがですか？」

「だいぶよくなりました」

しばらくしてねこをだいて職員室にはいっ

てきた。

「きょうこの子をあずかってください」

(きょうは園外保育に出かけるので、く

まをもつてきたのだと思つ)

「ええ、いいですよ、入院させてあげま  
しょう」

「きょうは先生ようじがあつて、いっし

よにいけないから、気をつけていってらっ

しゃいね」

「いってきまーす」

子どもたちは元気に出かけていった。

◇ ◇ ◇

これで病院ごっこは終りとなる。楽しい

三日間であつた。注射に対する恐れ、病人

に対する思いやり、病人の母親としてのし

ぐさなど、現実の経験がそのままに再現さ

れており、おとなと接しているような感じ

さえた。しかし、注射される人形にかわ

つて大声で泣いたその心理は、幼児期その

ものの姿であり、子どもの成長の過渡期と

して興味深いものがあつた。

(五歳児 九月二十一日・二十四日・二

十五日)

いも虫みつけたよ

あいつが

「先生、とおお君が早くきてといってい

るよ」

といつて、かけこんできた。教師は手がは

なせなかつたので、

「今ここで手伝っているから、もう少し

待つてね」というと、

「それが、だめなのよ、虫が逃げつて

しまふから」

という。それであわてて、下におりていっ

た。きく組の保育室のコンクリートのとこ

ろで、まさと・よしお・きくお・のぶ子が

頭を寄せ合つていっしょうけんめい下をみ

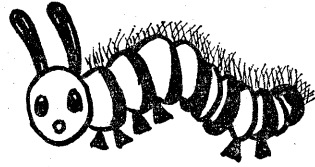
ているので、教師ものぞきこむ。きみどり

色で黒とオレンジ色のもよりのついた毛虫

をみながら足のようす、角などについて、

いろいろ話し合つていた。

「おい、これはみんながさわつて怒つて



るから角がでとるんだな」

「手でさわると毒がつくぞ」

「きつと蛾になるんだよ」

教師といっしょについてきたえつ子は、

「わたしのうちにもいも虫がいてね、と

つてきてずつとおいといたらあげは蝶にな

ったよ。きいろと黒の」

と自分の経験を話した。ひとりひとりの話の内容はあまりかみ合っていないのだけれど、美しい色のいも虫をみて何となく通じ

合っている子どもたちの会話は、きいていて楽しい。子どもたちはひとしきりみてしまうと、いも虫をどこへやるかということになった。教師は自然にかえした方がよいと思ったので、

「広いところへ逃がしてやったら？」

と提案すると、全員が

「それでいい」

という態度を示してくれたので逃がすことにした。しかし、みて楽しいけれど、さわるとはこわいので、みんながしり込みをはじめた。教師が落ちていた木ぎれにはおせて持ちあげると、まさと・よしお・きくおの三人が、ブランコのうしろの垣根の外まで持っていくてくれた。

◇ ◇ ◇

三人でしばらく垣根にもたれていも虫のようすをみていたようであったが、その後姿に動物に対する優しい思いやりと、自分

たちの発見がみんなに認められて、三人とも満足しているようすが感じられた。

(五歳児 九月二十五日)

### 野球ごっこ(その一)

遊戯室でけいすけを中心として、野球ごっこをしていた。カーテンを引いてナイターの感じを出しているようであった。中日が優勝する前から、野球ごっこを盛んに行っていた。積み木でスタンドを作ったり、ベンチを作ったり、またベース板にしたりして、遊戯室は野球場に早がわり。けいすけは、野球通で大の巨人ファンである。

「次は、王がバッターボックスにはいます」

などと、自分で解説しながらやっている。たみおとけいすけが巨人、じゅんた・よしみ・ひろみちのぶおが中日である。中日のメンバーはきのうと変っていたが、巨人

はたみおとけいすけである。野球をよく知  
っているけいすけの一方的な遊びになり、  
中日のメンバーはおもしろくなくなつてや  
めてしまった子どももおり変っていた。

「先生、野球みにきて、今から始めるよ」  
と呼びきたのでスタンド（積み木）に腰  
かけて、応援をすることにした。

「先生は中日か巨人か、どっちのファ  
ン？」

とけいすけが聞く。

「先生は中日が好き？」

一方的におしまくられている中日側の子ど  
もを、応援する気持ちも含めていうと、ま  
わりの子どもにも聞く。

「あんたたちは？」

みている子どもは、中日も巨人もわからな  
いらしく、

「先生はどっちが好き？」

ときいて、教師が

「中日」

といったので、みんなが中日ファンになっ  
てしまい、巨人ファンはひとりもないこ  
とになってしまった。

「いいわ、いいわ、巨人は強いので、だ  
れにも応援してもらわんでもいいわ」

と強がりをつけていたが、ちょっとさびし  
そうであった。



二対四という変則的な人数の野球ごっこ

であったが、子どもは、人数の相違を気に  
することなく、むしろ、たみおとけいすけ  
は、ふたりで四人に対抗するというこ  
得意になっていた。ひとりでピッチャーに  
なったり、バッターになったり忙しそうに  
動いていた。おとなは、両方のメンバーの  
人数を同じにしなければと思ったり、本式  
の野球のルールで遊ばせようとしたりしが  
ちである。子どもたちは、本式の野球をし  
たいと思っているし、しているつもりでい

るのだらうと思う。現実には、子どもたち  
はわかる部分のルールだけをとり入れてう  
まく遊びを進めていく。経験をつみかさね  
ていくうちにルールもわかり、加えられて  
いく。野球ごっこのようにルールのある遊  
びでは、子どもとおとなの考え方、感じ方  
のちがいを知らされることが多い。

（五歳児 九月二十七日）

### 野球ごっこ（その二）

きのうにつづき、野球ごっこをしていた。  
きょうは、けいすけと同じく野球通のあき  
おがでてきたので一段と氣勢があがつてい  
るようであった。巨人一三人、中日一四人  
ではじまる。きのうのようにメンバーが変  
ることなく、また、場もベース板をおくと  
いうのみで、ゲームに集中して遊んでいた。  
デッドボールあり、ファウルあり、フォア  
ボールありなど、いろいろボールを区別し

ていた。ことばだけは一人まえに大人のルールをそのまままねてやっている。しかし一方的に巨人の攻けきがつつき、守りの中日の子どもたちはつまらなくなり、じゅんたが、

「いちぬけた」という。

「どうしたんだ」

とけいすけが聞きかえした。

「つまらん、ちっともうてれんもん」

それを聞いてけいすけは、

「よし、選手交代、たみおいけ」

という。じゅんたは、とたんにうれしそうにバッターボックスにたった。二塁の守りについたらみおは、おもしろくなくなり坐りこんでしまった。それでもしばらくゲームがつづいた。坐りこんでいたたみおが立ちあがって、けいすけに何かいいにいった。すると、

「ピッチャー交代」

と声があり、たみおがピッチャーとなった。

誰もが動きのある役をやりたいと思っ  
てらしい。

◇ ◇ ◇

この一連の動きを見てみると、けいすけの野球に対する知識には、みんながいつもくおいていることがわかる。けいすけは自分の思う通りに進めていくのであるが、相手のいうことをうけ入れてポジションをかえていく。友だちがやめてしまつては、楽しく遊べなくなるので、ひきとめようとす  
るけいすけと、野球ごっこのおもしろさに引かれてなかなかやめられないでいる子どもとが彼の交代をしていったように、互いに引き合う関係の中で生じる感情の交流が教師に伝わってくる。彼の交代とか仲よくするにはということについて、「どうしたらよいか」ときけば、子どもたちはことばでは  
正当な答ができる。しかし、スムーズにいかないところをみると真に身につけている

とはいえない。真剣に遊ぶ中で、いろいろな感情を味わいながら、心情が育っているように思う。そのときどきの場面に接したとき教師は、双方の感情の交流のようすをみながら暖かい接し方をしていかなければならない。かたづけの時に、けいすけ・あきおが、「勝った、勝った」とよろこんでいたので、「よく野球を知っているふたりが、いっしょだもの」と勝つのは当然でしょうという気持ちでいってやると、あきおが、「だって、けいすけくんが、いっしょの組になろうっていうもん。そりゃ絶対ふたりがわかんないかんけど」という。野球をよく知っている自分たちは、わかれなければいけないという気持ちはもっているよ  
うだが、やっぱり勝ちたいという気持ちの方が強いようであった。しかし、他の子どもたちも、野球がわかってくるようになる  
と、このふたりの姿勢は変わってくるのではないだろうか。(五歳児 九月二十八日)